

沖

3

俳句雑誌 [2015]



振り代

能村 研三

谷中のヒマラヤ杉

恵方より無傷の竹を伐り出せり

人日やボトルキープの手書文字

安かれと千代呂木長老木のくびれかな

鶏が夢見る立春の望月に

能村家菩提寺の谷中の延寿寺には檀家総代を務めていることから、お盆やお彼岸の他に年に数回行くことがある。地下鉄根津の駅を出て、交差点から言問通りの坂を鶯谷方面に登った所を左へ折れると細い路地で、しばしば映画のロケなどにも使われるところである。この路地には新内岡本派稽古所などもあり、時折、三味線のお稽古をする音がよく聞こえてくることから「おけいこ横丁」とも呼ばれている。ここをもう少し進むと三叉路に出るが、ここには今や谷中のランドマークにもなっている大きなヒマラヤ杉が聳え立つ。江戸時代には三方地店（さんほううちだな）と呼ばれた歴史のある地区で、三方をお寺に囲まれた中に、古くからのお店や工房、アメリカ人の日本画家のアトリエなどもあり、大正、昭和の住宅も現在まで引き継がれ、

大股で上るきざはし厄詣

半端なる時間が生れて魚は氷に

振り代のある花種の袋かな

レーザーの指し棒が説く涅槃図会

逆波の白むを読みて魼を挿す

実直な人と退屈いぬふぐり

歴史ある貴重な町並みと風情をつくっている。

最近は何国語のガイドブックにも紹介されていることから、ヨーロッパからの中高年の観光客も散策していることが多い。

ヒマヤヤ杉のある角のミカドパンは、かつて榎の木のあるお団子屋で、近隣の人に加えて、芸術家、墓参客等、多くの方が立ち寄ったそうだ。

このヒマヤヤ杉は戦前、パン屋の店主の祖父が鉢植えの状態から育て始めたものだという。ところが最近、開発計画が持ち上がり、谷中のシンボルとして愛されてきた大木が伐られてしまうという話があり、この環境を守ろうという署名活動も行われているようだ。

延寿寺はこのヒマヤヤ杉のすぐそばにあり、父や母に連れて来られた時は、こんなに大きな木ではなかった筈で、私の半生をずっと見守っていてくれる木でもある。

蒼茫集



京の春

成宮紀代子

師走路地郵便バイク杼のやうに
年惜しむ音として聞く音又かな
箔打ちの話など聞く雪催
新妻の名の添ふ寺の年賀状
初雀老いの施設の窓辺にて
草色の市バス行き交ふ京の春

恋の誘ひ

安居正浩

獐猛な性を隠して白鳥は
屋上に一人の夜景クリスマス
風花を恋の誘ひと思ひたる
襜袍着て国の行く末考へる

手のぬくみ孫へと残す冬銀河
季語集の季語動き出す春隣

乾 鮭

久染康子

繩嚙まされし乾鮭のくやしかる
綿虫の夕暮れ色をしてゐたり
雪見舟景色だんだん重くなる
山褰に白線一本滝凍つる
小火見舞乾びし手と手握り合ふ
女正月勤め帰りに娘が寄りぬ

今日の力

大畑善昭

雪を掻くのみ太陽を十日見ず
ぐるり雪戸の開け閉ても力づく

腰決まるまでの危ふさ雪下し
雪を搔く今日の力をけふ使ひ
向ひ風受け除雪機の進むなり
吾が顔も古木もいびつ氷面鏡

口 伝 千田百里

顔細くして寒晴に打つて出づ
礼者われの名付く鳩亭通りかな
カステラの反発力や女正月
鷹鳩と化しひらがなを多用せり
掃く焚くに縁なき借景の落葉
亀鳴くや口伝といふはもどかしく

樹氷林 宮内とし子

底知れぬ藍の海より波の華
聖堂の木椅子直角冬深む
水仙の短く咲きて乱のあと
旅果のひと日や浮寝鳥に似て

樹氷林人間小さくなりにけり
九九が出来割り算も出来お年玉

切り替へる 甲州千草

法螺貝の余韻雲呼ぶ冬を呼ぶ
風花や護摩焚終へし僧の列
風呂吹にでもと置きゆく会津人
落下とは水になること大氷柱
雪搔きを終へたつぷりとジャムを塗る
七日粥吹きぬて明日へ切り替へる

柎 目 矢崎すみ子

俎板の柎目若水迎へかかな
蕭条と枯葉を鳴かす日のひかり
枯葎道の一つは熊の道
眠る山眠らぬ山も信濃晴
暁の闇あをあをと軒氷柱
義士の日や名の剥落の太鼓橋

卒寿の春 梅村すみを

舐むるほど卒寿の春を祝ふ酒
気のむくまま辿りゆく道恵方とす
白息をゆたかに少年すれ違ふ
この枯木高倉健にどこか似て
消防車すつ飛んで行く鎌鼬
雪しまく中の友禅流しかな

残像 辻美奈子

書初の墨照りかへす勢ひかな
乗初に水素で動く車とや
麦踏むや大地の磁場の懐に
燐光を残像として冬の蝶
雪ばんば火星生物探索機
ジーンズの漢の羽織るインバネス

触れてみむ 荒井千佐代

鷹の木と呼ばむ十本鍋島邸
椿落つ船蔵跡の急石階

神代鍋島邸四句

触れてみむ緋寒桜のふふめるを
柚子熟れて一戸にひとつ石の橋
黒ずめる潮紋十二月八日
数へ日の潮目くつきり塩買ひに

絵双六 小松誠一

器量良き柚子と混浴夜の更けて
若水で厳かに飲む常備薬
年礼や朴の幹にもそつと触れ
掠るるは勢のしるし筆始
買初や愛敬のあるレジにつき
振出しに戻れぬ現世絵双六

冬萌砂丘 遠藤真砂明

北斎の濤鎮もりぬ弓始
七浦に港七つや海豚飛ぶ
初漁の舵輪さばきも父を超ゆ
ダイバーゆく冬萌砂丘踏み鎮め
ラガー等のいちごつごつ腕立て伏せ
湖国の夕月に吊る酒林

六尺の雪 藤原照子

冬帝の一足飛びに力出す
風花や乳鋌の門の酒林
ビル間の駅舎百歳冬灯
六尺の雪のほひの賀状受く
夜神楽のしぐさ妖しき女面

絹 絵 吉田政江

一陽来復逆光の中車庫入れす
冬岬低く押さへて鳶の舞
朔旦冬至卵の黄味の二つ入り
洗はれて障子の棧にある木目
羽子板の絹絵の円き男振り
淑気かな絹の帷を沼に置き

海 鼠 森岡正作

寒雀てつぱう玉のやうに来る
一切れと言へど海鼠の貌を持つ
爛酒に食前食後なかりけり

枯野来て枯野を帰る種付け師
咳きの一つ大きく門に入る
煮凝や過去も未来も茫茫と

大 鏡 菅谷たけし

求名てふ小さな駅の花八つ手
田の神の面はまつ黒里神楽
朔旦冬至ざらりと髭の剃り忘れ
神仏は日向へ移し煤払
掠るるも滲むも楽し筆始
火事跡に残る床屋の大鏡

胸 中 楠原幹子

胸中に深き淵あり竜の玉
寒禽の鋭声体温計はさみ
亡き人の遠くて近し冬日向
一日が事なく過ぎて冬桜
塊の肉買ふ寒波来つつあり
生活にほふ私鉄沿線日脚伸ぶ

潮鳴集



大 仏 齊 藤 實

大仏の胴に繋ぎ目冬うらぢ
料理酒にぼつと火の付くクリスマス
火と水を静かに迎へ年新た
煤逃げやひとつ溶けゆく角砂糖
ワイングラス逆さに吊られ冬ごもり

風 紋 峰 崎 成 規

群れてよし孤高なほよし冬鷗
若水や海に命の起源あり
大寒の闇の底突くハイヒール
ドアノブの軽き回転春隣
風紋に無頼印して吹雪去る

笑ひつばなし 菊川俊朗

鮫鱈の笑ひつばなしの切られやう
年惜しむ抽斗のものみな戻し
鳶の目に常の景あり初山河
御降の檜皮葺より濡れはじむ
水仙の今が食べ頃かもしれぬ

賀状来る 今瀬一博

ひたひたと鶴にもならず紙を漉く
餅を搗く悪妻賢母と言ふべかり
賀状来る百語に勝る一句置き
血の管の太きを思ふ寒稽古
横顔の太宰治や山眠る

沖作品



能村研三選

凍鶴の一本足の強さかな

東京 山下ひろみ

勝独楽も筑波山も肩をいからせて

験担ぐ窮余の策の初みくじ

大氷柱ヒユッテの軒に魔女の爪

ものいはぬ会計ソフト去年今年

花枇杷や像の一指は天を指し

殉教像冬かげろふの只中に

旅盛んなりし彼の日の冬帽子

片肺の胸に柚子よせ長湯せり

嫁がせて終る父の座冬桜

凍土の形状記憶とふ記憶

酒林寒九の水を供へけり

練炭の炎眩しき渡し舟

冬北斗青一筋を貫けり

湖の天弓形に浮寝鳥

長崎

河本 功

神奈川

小林 和世

鳩時計ぼつぼと鳴いて去年今年

千葉

勝ち馬に乗つて疾走夢はじめ

微動だにせぬ大鷹の目の睨み

喪の家の悲しみ閉ざす白障子

冬の雨禅僧作の庭無音

新玉や刻む振子の音ぞのみ

身の締まる風に真向ひ初散歩

子等を待つ卓の真中の冬苺

「はやぶさ」の六年の旅や冬銀河

ランナーの手袋捨てて追ひ込めり

夕されば日矢の一隅冬紅葉

街頭に浮きつ沈みつ冬帽子

鳥籠の中のいのちや北塞ぐ

緞帳の帆船揺らぐ大噓

戦友へ父の代はりに賀状書く

愛知

近藤 鉦子

長崎

円城寺 清

岡 真紗子

沖作品 15句選評

*
能村研三

凍鶴の一本足の強さかな 山下ひろみ

雪原の中で鶴が一本足で立ち、凍りついたように身動きもせず頭を翼深く隠している姿は、まわりの景色と共に凍ってしまつたように見えて美しい風景である。まさに孤高の姿とも言える。鶴の足はか細いが、うまくバランスを取り眠る時も片足立ちとなる。これは片方の足を羽毛の中にしまいこんで体温の口スを少なくするためと言われている。高野素十の句に「凍鶴のやをら片足下ろしけり」という句があるが、作者はか細くてもしっかりと立つ凍鶴の足の強さに驚きを感じた。

嫁がせて終る父の座冬桜 河本 功

小津安二郎の「秋刀魚の味」という映画を思い出した。笠智衆演じる孤独な父親と娘役の岩下志麻によって娘を嫁がせた父

親の「古い」と「孤独」というテーマが描かれていた私も三人娘のひとり嫁がせた父親であるが、この句には嫁に行かせるという大きな役目を終えた父親の安堵感と一抹の淋しさが詠まれている。冬桜という季語をもってその気持が伝わってくる。

練炭の炎眩しき渡し舟 小林 和世

冬の寒い時期に渡し舟に乗ることがないので、詳しいことは判らないが、吹きさらしの川面を渡る冷たい風が肌身に沁みることだろう。我が家の近くの渡し舟というところの渡しがあるが、対岸の柴又まで僅かな距離しかなく、暖房が果たして必要なかと思うこともあるが、やはり何か所かに置かれた練炭火鉢は温かいもてなしである。

冬の雨 禅僧作の庭無音 岡 真紗子

昨年の秋京都を旅した時、大徳寺の塔頭のお庭をいくつか拝見した。久しぶりに見た禅宗のお寺の庭のシンプルなたたずまいにすっかり魅了されてしまった。先師登四郎が龍安寺の石庭を詠んだ句で「睡みては拒み忘春の石十五」という句があるが、禅宗のお寺の庭には枯山水に臨む深山幽谷、白砂に広がる禅の小宇宙がある。ここで詠まれた禅僧作とは室町時代の夢窓疎石のことであろうか。禅宗は、室町時代における禅発展の基礎を築き作庭にもその名が知られている。作者が訪れた時は冬の冷たい雨が降りしきる中、庭から伝わってくる無音の世界を堪能した。〈以下略〉